What's News



ニュース・リテラシー広めるには?

早稲田大の学生15人 読売新聞社に提言

早稲田大学と読売新聞が連携して2022年秋に実施した課外教育プログラム「プロフェッショナルズ・ワークショップ」(プロプロ)は、「ニュース・リテラシーを広めるには?」のテーマについて学生15人がグループワークで議論を深め、読売新聞社への提言をまとめた。

ワークショップの期間は10月中旬から12月中旬にかけての約2か月間。5人ずつ3グループに分かれた学生たちは毎週火曜日の夕方、東京・西早稲田の早稲田キャンパス3号館の教室に集まり、提言に盛り込む内容を話し合った。この間、ニュース・リテラシーについての模擬授業で小中学生の気持ちになって話を聞いたり、NHKでメディア情報リテラシーの番組に携わっている大橋拓さんに記者として取材したり、様々な立場・視点からアプローチした。

「そもそも、ニュースってなに?」「リテラシー教育のターゲットはどんな世代?」「子どもたちに興味を持ってもらうには?」など次々と質問や疑問が出て、教室だけでなくインターネットのチャットでも熱心にやり取りを重ねた。

ニュース・リテラシー

正確で信頼できるニュースを見分け、正しく読み解く力のこと。インターネットとソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) の普及で、だれもが簡単に情報を発信することが可能になり、偏った情報や極端な意見が出回ったり、フェイクニュースが拡散したりといった動きが加速している。ニュースを活用できる能力を養うことが必要になっている。

読売新聞社では、子どもたちにニュース・リテラシーを身につけてもらうため、小中学校や高校でモデル授業を試み、教室で活用できる教材の開発にあたっている。さらにどんな取り組みを進めればいいか、早稲田大学の学生に提言を求めた。

早稲田大学プロフェッショナルズ・ワークショップ

企業や社会が抱える課題の解決策を、学生チームが連携先の企業に直接提案する課題解決型のワークショップ。プロフェッショナルズ(企業人)の指導や監修のもと、学部・学年を超えて集う学生同士がグループワークでの議論を通して考える。



2

考えて 考えて 考え抜く

ニュース・リテラシー なぜ必要?

読売新聞東京本社 (東京・大手町) で行われたワークショップ。 鈴木美潮 記者が「なぜニュース・リテラシーが必要か」について説明し「情報があふれ かえる時代において求められているのは、情報収集能力ではなく、情報を吟味 し、正しい情報を見分ける能力」と話し、「選『情報』眼を養うために、新聞は 有効なメディア」と強調した。

続いて15人は編集局を見学。「どうやって紙面に掲載するニュースを決めて いるのですか」「このフロアではどんな役割の人が仕事をしているのですか」な どと質問。原稿の誤りをチェックする校閲部という専門部署があることを鈴木 記者から聞いて、驚いた様子だった。













ニュースや情報 どう活用?

鈴木記者の話を聞いて、ニュース・リテラシーの輪郭は何となくつかめた が、まだイメージは浮かばない。提言に向けての議論を進めるながら、15人は ニュース・リテラシー教育 (NLE) の模擬授業に臨んだ。先生役は読売新聞 教育ネットワークの田中孝宏・アドバイザー。長く東京都内の公立小学校長 を務めた田中アドバイザーは、小中高校の児童生徒を対象にNLEの授業を 行っている。

「情報って何だろう」「ニュースって何だろう」「この二つはどう違うの?」 田中アドバイザーが次々に繰り出す質問に、15人は懸命に答えを探る。

「受け取ったニュースや情報を、どうやって活用するかを考えよう」「とにかく みんなで話し合うこと。これが一番大事」

答えがない授業だからこそ、考え抜き、話し合うことが重要だと訴える田中 アドバイザー。その言葉に深くうなずく。

NHKの大橋拓さんに取材

取材も体験した。NHKで「つながる! NHKメディア・リテラシー教室」の運 営に携わっている大橋拓さんを招き、質問を浴びせた。

大橋さんはアナウンサーとしてNHKに入局。米国の大学に派遣されて研究 し、帰国後にメディア・リテラシー教室の発足に参加した。教室は、全国の小 学5、6年生がオンラインで意見を交わしたり、発表したりしながらメディア・ リテラシーを楽しく身につけてもらうことを目指している。

「リテラシーを子どもたちと考えるときに難しいことは?」「解決したい課題 は?」などの質問に大橋さんは「正解がないということを、子どもたちや先生に 理解してもらうのが難しい」「メディア・リテラシー教室を続け、どうひろげてい くかが課題だ」などと答えた。







重ねた議論 深めた考え 大きく結実

3チームが提言発表

3チームは、読売新聞社への提言をスライド18~25枚にまとめ、12月に発表した。早稲田大学の伊藤達哉・教務部事務部長、荻原里砂・教務部教育連携課長、読売新聞東京本社の東武雄・教育ネットワーク事務局長らが見守るなか、ニュース・リテラシーを普及させるための方策を説明。それぞれ課題を明確に指摘したうえで、具体的なアイデアを披露した。





上・中:メンバーから出た意見をホワイトポードに書き出し、さらに議論を重ねる下:提言発表を聞く伊藤事務部長(右)と東事務局長(方)

提言

子どもと親のニュース・リテラシーを 高めるために、昔話を今までと違った視点で見る 教材を用意するべきだ

対象に保護者を加えることで、子どもと一緒に考えてもらったり、内容が難しいところをサポートしてもらったりすることが可能になる。ニュース・リテラシーの講義を受けた大学生が授業を行う形にして、新聞社が講師を派遣するよりも多くの人にアプローチできるようにする。昔ばなしの教材としては、小学生にもなじみ深い「赤ずきんちゃん」を取り上げる。新聞、テレビのリポーター、SNSの情報発信を比較し、多様な観点から情報を吟味する力を身につけてもらう。

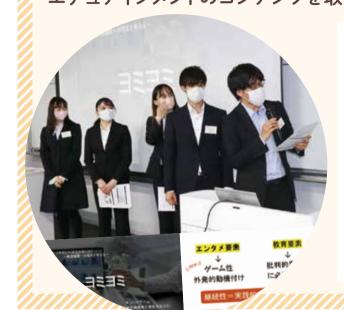


提言

小学校4~6年生のニュース・リテラシーを 高めるために、読売新聞オンラインに エデュテインメントのコンテンツを取り入れるべきだ

Team B キンコイチーム 岡谷侑晟、石橋亜莉梅原舞、八巻悠

> Team C Ying ₹—A



大学・ディンメント」は、エンターティンメントとエデュケーションを融合した言葉。学校での授業は一過性になりがちで、講師の数が少なく、実施できる学校が限られている。ゲーム性を取り入れたアプリを開発し、クイズに答えたり、動画を見たりして、手軽にニュース・リテラシーを身につけることができるようにする。継続してニュース・リテラシーを考えることになり、定着も図れる。クイズは、様々なニュースの真偽や、過去のフェイクニュースを見て、危険性やあやしい部分をこたえてもらう。

提言

高校生のニュース・リテラシーを 高めるために、寝ない! 将来使える! 継続型の教室を作るべきだ

高校生の中には、授業でニュース・リテラシーを扱っているが、情報の入手はテレビやネットで十分と思っている人もいる。過去の事例をもとに、「正しいニュース」かどうか、ゲーム形式で気づいてもらう。また、新聞・テレビ・ツイッター・ラインなどの信頼度を点数化して比較し、議論する。新聞記事を読み解き、意見をまとめ、話し合う。記事を選んだり、ディスカッションをしたりすることで能動的に関わることになり、眠くならない。紙の新聞に親しむことで高校生の新聞への抵抗感を減らすことにもつながる。



6

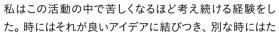
プロプロに参加した皆さんの感想

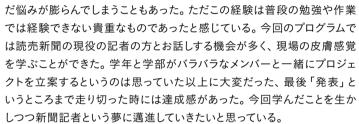
※学部・学年は2022年度当時

現場の皮膚感覚学べた

阿部 晶太郎(教育学部1年)

Shoutarou Abe





自分の課題 社会人の観点から発見

世羅 雪月(文化構想学部2年)

Yuzuki Sera

今回、早稲田大学のプロフェッショナルズ・ワークショッ プに参加し、チーム単位での活動と社会人と接する機会

を持つことができて非常に有意義な経験になった。チーム単位での活動 においては、異なる背景や専門分野を持つメンバーとの議論を重ねるこ とで自分の視野を広げることができた。またメディア業界で働くプロフェッ ショナルの方々から都度フィードバックをいただくことで、自分の課題点や 成長すべき点を社会人の観点から見つけることができた。こうした経験を 今後のキャリアや人生において生かしていきたいと思う。

答えのない課題考え抜いた

倉田 友美(法学部3年)

Yumi Kurata

情報は日常にあふれている。しかし、正しい情報の見 分け方を知る機会は少なく、私自身の理解も浅かった。

ニュース・リテラシーを学ぶだけでなく、どう広げるかという答えのない課 題に対して頭が痛くなるほど考えた2か月間だった。提言を考える中では、 グループで意見をまとめる困難さを痛感した。さらに、グループで議論を 重ねて作成した原稿も修正点が多くあり、提言の「具体性」や「実現性」 の追求に苦戦した。実際にニュース・リテラシーの活動をされている方々 の生の声を聞きながら、様々な活動ができたことは今後にも役立つ貴重 な機会だった。

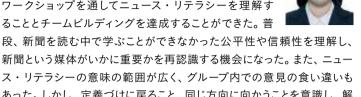


意見の違い 日的を意識して解決

大城 伊織(教育学部3年)

lori ooshiro

ワークショップを通してニュース・リテラシーを理解す ることとチームビルディングを達成することができた。普



新聞という媒体がいかに重要かを再認識する機会になった。また、ニュー ス・リテラシーの意味の範囲が広く、グループ内での意見の食い違いも あった。しかし、定義づけに戻ること、同じ方向に向かうことを意識し、解 決できた。この貴重な経験を生かし、情報を吟味する力であるニュース・ リテラシーを意識していきたい。

苦労したからこその成長

吉田 るな (文化構想学部1年)

Runa Yoshida

今回のプロフェッショナルズ・ワークショップを通して、 不確かな事象に対して自分たちなりのアプローチを考え

ていくことの難しさを痛感した。ニュース・リテラシーは明確な定義がな いため、目指すべき状態の設定から他者と意見を共有しながら行うことが 難点でありながら醍醐味でもあったと思う。考えていることを明確に言葉 にしながら、それらに説得力を持たせていく。この過程で最も苦労したか らこそ、一番成長できたと感じている。チームメイトとディスカッションを 重ねる中で多くの刺激を受けた時間だった。

議論重ねてワンチームに

八巻 悠(政治経済学部2年)

Yu Yamaki

ニュース・リテラシーは、確立した概念ではなく、定義が 曖昧な概念だった。そのため、自分たちの中でどのように

定義するのかという議論に非常に時間がかかり、迷走していた時期もあっ た。しかし、2か月間共に同じ課題に向き合うチームメイトとたくさんの議 論を重ねることで一つのチームとしてまとまり、駆け抜けることができたと 思う。本気で課題に向き合った充実の2か月間だった。ありがとうござい ました。

自分の役割見つけて課題に向き合う

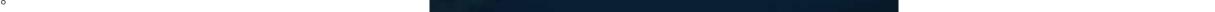
梅原 舞(教育学部3年)

Mai Umehara

頭から煙が出るほど考え抜いた2か月間だった。グルー プワークでは、新規性と実現性の両立や、意見の集約が



容易ではなく、全員が考え込む場面もあった。加えて、自分の考えを言語 化することの難しさも痛感した。しかし、チームの中に強みを生かせる自 分の役割を見つけることができ、一つの課題に徹底的に向き合う大変さ と楽しさも知ることができた。連日話し合いを重ねて臨んだ最終報告会の 後、達成感と同時に「もっと考えたい」という思いも抱くほどあっという間 で、かつ、チーム内の結束が強まる濃密な日々だった。



自分と向き合い続ける日々

石橋 亜莉(文学部3年)

Ari Ishibashi

今回のワークショップを通じて、ニュース・リテラシーの 重要性を実感するとともに、広めていくことの課題が山積



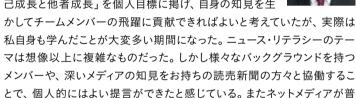
みであることを感じた。また期間中は様々な方のお話や思いを聞き、チー ムの中で議論をしながらも常に「私のニュースや情報への向き合い方は 正しいものか」と自分と向き合い続ける日々になった。この経験を通して ニュース・リテラシーの重要性を自分ごととして「実感」することができた ため、これからはこのような「実感」をより多くの人に持ってもらえるように 努力したいと思う。

協働することで実りある提言に

岡谷 侑晟(教育学部4年)

Yusei Okava

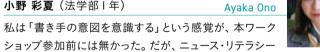
プロプロが2回目かつ4年生だったということもあり、「自 己成長と他者成長」を個人目標に掲げ、自身の知見を生



「ほうれんそう」の重要性体感

及する中での新聞の役割を実感することができた。

小野 彩夏(法学部 | 年)



について、専門的な知識を有する方々から多くを学ぶ中で、情報があふれ た現代でフェイクニュースに惑わされないために、情報の中の意図を考え るように変化した。また、グループワークでは多角的な意見を取り入れる ことができる反面、小さな事柄でも受け取り方の違いを生まないよう、報 連相を欠かさないことの重要性を体感した。

アイデアまとめる難しさ痛感

上野 詩織(教育学部2年)

Shiori Ueno

ニュースとは何か。メディアとは何か。それらを上手く活用 するにはどうしたらよいのか。身の回りは情報であふれて

いるのに、ここまで真剣に考えたことはなかった。加えてプロの記者の指導 を受け、新聞の面白さにも気がついた。提言発表に向けて、グループでの 会議を重ねる中、自身の課題も見つかった。活動期間中は、自分の中から アイデアを生み出す難しさ、それを言語化することの難しさ、一つの形にす ることの難しさを痛感した。プロプロでの経験を今後に生かし、成長してい きたい。このプログラムに関わってくださったすべての人に感謝したい。



社会で求められるスキル学べた

青栁 孝信(教育学部3年)

Takanobu Aoyagi

一つの目標に向けて長い時間をかけてグループ内で議論 し、何度も精査を重ね、結論へと導くことは、時には難し



く感じることもあったが、達成感があった。メンバーからの意見は、毎回自 分自身が気づかなかった点を指摘してくれたこともあり、大変刺激になっ た。ターゲット層を意識し続けること、相手に効果的に伝わるようにするこ となど、社会で求められるスキルを学ぶことができた。最近も国内外で情 報を巡るトラブルが頻発している。様々なメディアから情報を得て発信す る前に、鵜呑みにせずに考える姿勢を持ち続けていきたいと感じた。

協力する能力鍛えられた

沈 意境(政治経済学部3年)

今回のプロプロではメディア・リテラシーが教育現場で 展開する現状と課題について深く考えさせていただいた。

とても貴重な体験だったと思う。2か月のグループ活動も他の人と協力す る能力を鍛えることができた。また、模擬記者会見に参加し、執筆した原 稿を読売新聞の記者から添削していただいたことも勉強になった。マスコ ミ業界を志望しているが、現場で数十年経験を積んだ記者の意見はとて も参考になった。プロプロを経験したことで記者になる志望を固めた。こ れからも、メディア・リテラシーの普及や取材活動に向けて努力したい。

がむしゃらに行動する中で成長

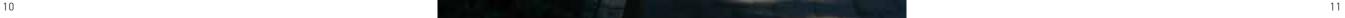
平塚 絢子(文学部4年)

Avako Hiratsuka

気づき・疑問・驚きの連続だった。ニュース・リテラシー の定義をすぐに言える方が何人いるだろうか。私自身も



答えられなかった一人であり、ニュース・リテラシーとは何かを探りなが ら考え続けた。チームメイトと意見が違うことや思うように進まないことも あったが、その分発見が多かった。考えの枠組みを外すこと、突撃インタ ビューしてみる……とがむしゃらに行動する中で少しでも成長できたよう に思う。貴重な機会を下さった読売新聞様と大学、そしてチームメイトの 皆様、ありがとうございました。





さらなる学びへ そして社会へ

荻原 里砂 教育連携課課長

ニュース・リテラシーは、学生たちにとって、今を、そしてこれからを生きる中で重要かつ必要不可欠な要素です。今回は「ニュース・リテラシー」とは何か?



という問いから始まり(その先何度も考えることとなりました)、さらにそれを広めるには誰を対象にどのように進めるか、学生たちは考えに考え抜いた2か月間でした。

正解のない課題に真摯に向き合い自分たちの納得のいく提言にまとめあげる中で、チームで取り組むことの難しさと喜び、自分の考えを言葉にして他者に伝えることの大切さと難しさ、読売新聞社や講師の方々からいただいた最新かつ実践的な知識・知恵・価値観等、身をもって触れることのできた濃密な時間となりました。

学生たちにとっては全てが納得のいくプロセスや結果ではなかったかもしれませんが、それをこれからの早稲田大学での更なる学びや学生生活の新たなステップにつなげることこそが、何より大切なことと捉えています。

今回出会った厳しくも温かい読売新聞社や講師の「プロフェッショナルズ」の方たちとの交流を通じ、社会には仕事に対し情熱を持って真摯に向き合っている素敵な大人たちがいることを知り、社会へ出ることへの期待や希望をもち、また自分もその一員となるべく準備をすすめる決意をもつことが本ワークショップの目的であり、今回、十分に達し得ました。読売新聞社の皆さまには惜しみないご尽力をいただき、誠にありがとうございました。

回重ねるごとに精度高く

下田 隆博

学生たちは答えのない課題に対して、学部も バックグラウンドも異なるメンバーでチームとして1つの結論を 出す難しさ、回を重ねるごとにチームワーク力や議論の精度が増 していくことの楽しさなど、多くの学びがあったと思います。

このような機会をご提供いただいた、読売新聞社関係者の皆様、ありがとうございました。

新たな学びや気づき

鈴木 紳

グループで学生各々が個性を発揮し、議論を 重ね、提言を仕上げる様子を間近で見ることができました。

一つのテーマに対してじっくり、学部学年が異なるメンバーで 考える機会は貴重で、学生は新たな学びや気づきを得たことと 思います。

読売新聞社の講師皆様、大変貴重な機会をご提供いただき、 誠にありがとうございました。

培われた力 実践を

駒野 亮太

「ニュース・リテラシー」という、あまり馴染みのないものに対してお互いの認識共有や定義付け、そこから学生らしいアイデアに結びつけていく工程を苦しみながらもやりきった学生たちに敬意を表します。ニュース・リテラシーを広める第一歩として、ワークショップで培われた"ニュースとの付き合い方"を今後も実践してほしいと思います。

自分にしか見えない風景大事に

田中 庸子

約2か月間、本当にお疲れさまでした。ワークショップ期間中、全速力かつ真摯に考え抜いた皆さんを大学職員として誇りに思います。皆さんにとってこのワークショップがどのような糧になるかは分かりませんが、応募時の志望動機と走り切った皆さんにしか見えない風景を大事にしていただければと思います。

学生生活の財産のひとつ

吉澤 安世

新聞への知見を深めつつ、本当にどの学生 も回が進むごとに頭から煙が出るくらい真剣にメンバー同士で 「ニュース・リテラシー」について話し合っていました。

そんな姿をそばで見守りながら、この普段の授業とはまた違った難しさを乗り越えた体験は、学生生活における財産の1つになったのではないかと感じました。



情報の取捨選択 胸に刻んで

東武雄 読売新聞教育ネットワーク事務局長

あまりないのではないでしょうか。

人間は日々、情報を取捨選択し、自分の中に取り込んで生きています。「どの情報を使い、捨てるか」という自分なりの物差しがあるはずですが、それを意識することは日常生活の中で、

SNSを通じて誰でも情報を発信できる世の中です。一方で、AIや画像技術などの発達により、「確かな情報」と「不確かな情報」を見分けることはますます難しくなりました。そのような現代で新聞社は日々、情報を取捨選択しながらニュースを報じています。取捨選択の物差しの一つは裏付けの有無であり、あらゆる手段を講じて情報の確度を高め、原稿に凝縮して報道しています。

新聞社が正確性の追求とともに、客観性や公平性を心がけるのはなぜか。それは、誤った「ニュース」は社会を混乱に陥れると思うからです。歪められたり、大げさだったり、悪意があったりする「ニュース」は人を傷つけかねないと考えるからです。

今回のワークショップに参加した学生の皆さんは、ニュースを受け取る側として、その真偽を見極めることの大切さについて深く考えてくれました。あふれるニュースに接した時、友と頭を悩ませたほろ苦い記憶とともに「リテラシー」の言葉を思い出してくれたなら、これ以上の喜びはありません。

問い続ける人に

田中 孝宏 読売新聞教育ネットワークアドバイザー

ニュース・リテラシーは、ユネスコが提唱するメディア 情報リテラシーの中の数あるリテラシーのひとつです。米

国のトランプ前大統領とともに「フェイクニュース」という言葉が広まったのをきっかけに、ニュースの真偽を問い、ニュースとは何かを考えることの重要性が高まったことが背景にあります。米国では学校で、あるいはメールマガジンなどを通じて教育の一環に取り入れられています。

ニュース・リテラシーを身につけることで、ニュースを読み、学び、吟味する「よみとく力」を得ることができます。それは、情報の社会を生きるために、なくてはならないものです。プロフェッショナルズ・ワークショップでは、その内容をわかりやすくどう伝えたらよいかという課題が学生の皆さんに投げかけられました。

わたしも学校に出向いてニュース・リテラシーの授業を行っていますが、毎回、反省ばかりで、なかなか思うように伝えられずにいます。ニュースというものと面と向かうとその多様な価値に惑い、信念を揺さぶられます。それでも、ニュース・リテラシーを伝えなければならないという思いが消えることはありません。学生の皆さんもきっと同じような経験をしたことでしょう。

情報はテクノロジーの進化と共に千変万化し続け、その真の姿に出会うことが難しくなっています。そうした中で、ニュースはその価値を保つことができるでしょうか。解なき問いは、世の中に満ちています。それでも問い続けることを止めない人でいてほしいと願っています。

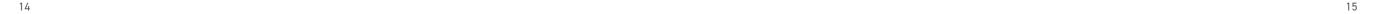














What's News Literacy? 早稲田大学 × 読売新聞社 プロフェッショナルズ・ワークショップ 2023年5月発行

【発行】

読売新聞 教育ネットワーク事務局

【編集・制作】

東武雄 石塚公康 鈴木美潮 石橋大祐 田中孝宏 横山聡 橋本弘道

〒100-8055 東京都干代田区大手町 1-7-1 読売新聞東京本社 ☎ 03-3217-1967 Fax:03-3217-1968 Mail:ednet@yomiuri.com

